|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| ア　農薬使用上の注意事項 | |  |
| （ア）　農薬使用上の注意事項（水稲 殺虫剤・殺菌剤） | |  |
| 項目 | 内容 |  |
| 水稲の種子消毒 | １　種子消毒を行う前に必ず塩水選を行い不良籾を除去する。　　 ２　消毒後は、水洗しない（水洗いすると消毒効果が無くな  る）。　　 ３　風乾が必要な剤は処理後必ず風乾し、薬剤を十分固着さ 　せる。(イネシンガレセンチュウを消毒する場合、風乾により  死亡率が高まる。）　　 ４　種籾はバラ漬とする（布袋等薬液の通りが悪いものへ入れて  の消毒は行わない）。　　 ５　種子消毒中の温度管理に注意する。　　 ６　種子消毒後の浸種は、流水中並びに河川、湖沼及びため池で  は行わない。 　　また、使用済み薬液は河川等へは流さず、産業廃棄物として適正に処理する。 |  |
| 水稲の育苗箱施用 | １　育苗箱施薬剤は、本田での水面施用はしない。　　 ２　次に該当するほ場では、一般的に薬害が生じる恐れがあ  る。　　  (１)　砂質土壌、漏水過多、生わらなどの未熟有機物の多用、  強還元土壌など苗の活着や根張りの悪い田　　  (２)　軟弱徒長苗、むれ苗、老熟苗　　  (３)　移植後に低温が続き、苗の活着遅延が予想される場合　　  (４)　移植後に極端な高温(30℃以上)により、植え傷みが予想  される場合 ３　養魚田及び付近の水田、養魚池等に田水が流れ込む恐れのあ  るところでは使用しない。また、使用した育苗箱は、養魚田、  養魚池その他魚介類に影響を及ぼす恐れのあるところでは洗浄  しない。 ４　薬剤が茎葉に付着すると薬害が生じやすいので、苗がぬれて  いる場合は、葉の水滴を払い落としてから散布する。散布直前  にはかん水しない。　　 ５　育苗箱の床土が乾燥していると薬剤が落下して効果が低下す  るので、散布直後は軽くかん水する。　　 ６　田面を露出させると薬害を生じやすくなり、また、掛け流し  をすると効果が低下するので、移植後は直ちに水深２～３cmに  湛水する。 ７　不均一な代かき、極端な浅水や深水、深植えは、苗の生育に  悪影響を及ぼし、薬害を生じやすくなるので行わない。 |  |
| 抵抗性誘導剤 | 抵抗性誘導型のいもち剤を含む箱施用剤は、いもち病の発生しやすい６月以降の施用では効果が劣る場合があるため注意する。 |  |
| 薬剤耐性・抵抗性 | １　ＱｏＩ剤（ストロビルリン系薬剤）耐性イネいもち病菌の発生が、他県において報告されている。耐性菌の発生リスクを低減させるため、次の事項に注意する。  (１)　種子は毎年更新し、塩水選と種子消毒を行う。  (２)　ＱｏＩ剤は最大でも年１回の使用とし、体系防除を行  　う場合は、作用性の異なる剤と組み合わせ、連用は避け  る。  (３)　育苗箱処理の薬剤は、耐性菌の発生リスクの低い薬剤  を選択する（長期持続型ＱｏＩ剤の育苗箱処理は、耐性菌  の選択圧を高める恐れがある）。  　やむをえずＱｏＩ剤を育苗箱処理する場合は、１年もし  くは２年毎に作用機構の異なる薬剤とのローテーションで  使用する。  (４)　採種ほ及びその周辺ほ場では、ＱｏＩ剤の使用は避け  る。２　ウンカ類の薬剤抵抗性の発達が報告されている。次の事項  に注意し、防除に重点を置く種を中心に効果的な薬剤を選ぶ  こと。  (１)　トビイロウンカは、イミダクロプリド、チアメトキサ  ム、クロチアニジン、ブプロフェジンへの抵抗性発達の可  能性がある。  (２)　セジロウンカは、フィプロニルへの抵抗性発達の可能  性がある。  (３)　ヒメトビウンカは、九州などの西日本ではフィプロニ  ルとイミダクロプリドへの抵抗性発達の可能性がある。 |  |
|  | 注　農薬登録は令和６年１月現在 |  |